

服部（堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会）

皆さん、こんばんは。本日は、お忙しいところ、こんなにたくさんの方々にお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。ただ今より、「水辺×まちづくり 堀川の水辺空間活用シンポジウム」を開催いたします。

本日は、堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会、堀川ウォーターマジックフェスティバル実行委員会、名古屋都市センター、名古屋市の 4 団体の協働主催で開催いたしました。タイトルに「堀川×まちづくり」とありますが、これは、「堀川“かける”まちづくり」と読んでいただきたいと思います。“かける”の意味は、本日のシンポジウムを行ったアウトプットを倍々にして、大きな成果にしてほしいという思いをもって付けられたものですので、ご理解いただければと思います。

私は、本日の司会を勤めさせていただきます、堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会事務局長の服部と申します。よろしくお願いいたします。

本日お越しの皆さまは、私がよく存じ上げている方も多数いらっしゃいますし、初めてお目にかかる方もいらっしゃいます。動員をかけたわけではないのですが、ほぼ満席になりました。それだけ、堀川への関心の高さや期待を大きく感じます。

本日シンポジウムの趣旨は、皆さんは一生懸命堀川に取り組んでおられると思いますが、もっとも何か良いことがあるのではないかと、色々な事例を聞きながら、色々なことに気づいていただきたいというものです。「気づき」を出すということが、本日の最終テーマです。気づいたことを“かける”ことで、大きな成果にしていきたいと思っています。本日、大阪や広島や東京から発言者として来ていただいた皆さんの中には、もうすでに今朝から堀川をずっと歩かれて、現地を見ていただいた方もいらっしゃいます。そういう方々の素晴らしい熱意を私たちも受け取って、本日のシンポジウムを有意義なものにできたらと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

シンポジウムは 2 部構成になっています。第 1 部は、大阪、広島、東京で水辺空間での取り組みを行っている皆さんから、それぞれの取り組みについてお話していただきます。そして第 2 部では、コミュニティデザイナーとして全国各地のまちづくりに関わっておられます、studio-L 代表の山崎亮さんからお話をいただき、その後、名古屋のメンバーとの意見交換を行う予定です。それでは、早速ですが第 1 部を始めたいと思います。

【第 1 部 各都市事例紹介・水辺とまちのつながり方】

服部（堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会）

1 つ目の事例であります、NPO 水都 OSAKA 水辺のまち再生プロジェクト理事の末村巧さんから、水辺ランチや水辺不動産、水辺マップの活動を通じた、市民や沿川地権者等への水辺の魅力や情報発信について、お話しいただきたいと思います。

それでは末村さん、どうぞよろしくお願いいたします。

末村（NPO 水都 O S A K A 水辺のまち再生プロジェクト）

初めまして。大阪から来ました末村です。NPO 法人水都 O S A K A 水辺のまち再生プロジェクトで理事をしています。8 年位 NPO をやっている中で、新陳代謝をしています。その中で、今一番エネルギーを割いている活動というのが北浜テラスであり、本日はそのお話をしに参りました。これはうちの NPO だけでやっているわけではなく、他の NPO や地権者の方々で行うことが出来た活動です。北浜テラスを中心に、どのようなことをやってきて、今の動きにつながっているのかを説明できたらと思い、構成を考えて参りました。

大阪川床北浜テラスは、北浜水辺協議会という形で取り組んでいます。構成メンバーは、地元の町内会、ビル・店舗のオーナー、NPO 団体 3 つ、大阪まちプロデュース、行政、大阪府、大阪市が入っています。

大阪の河川敷で占有許可をとって川床を出すというものです。京都の川床は全国的に皆さんよくご存じだと思いますが、京都でできてなぜ大阪でできないのかという発想からの取り組みで、構想としてはだいぶ昔から我々の中にはあったのですが、ある機会に今ご紹介した方々との出会いがあり、実現したものになっています。川床が出ている場所は、大阪の中之島というところです。大阪中心で水の回廊という呼び方をしているところの一番北の部分に中之島があり、河川があります。その河川敷の一部で、床を出す事に成功しています。床を出す前は建物、整備空間、護岸があって、川があるという場所でした。行政もプランターを置いて護岸を緑化するという事を数年前に試みていましたが、なかなか陽当りや植生が合わずに、うまく育っていませんでした。動かす事ができないプランターだったので、すごく荒れている状況でした。地元の利用者も、誰が掃除するわけでもなく、かつフェンスがあってそれを乗り越えなければ掃除もできない状況だったので、不満を感じていました。ただ、その向こう側は川と中之島で、中之島の一部は公園になっており、景色が良い場所です。このような状態から、3 つのことをテーマに設定し、スタートしました。一つ目は、風物詩を作るということです。大阪の場合、とかく“風流を解さない人達”というように全国的に位置づけられている部分があると思うのですが、やはり風物詩にしたいなあと思いました。それと、川を日常シーンに取り組もうということです。イベントやフェスティバルなど、晴れの場で使うのもいいですが、ごくごく普通にオフィス街に流れている川なので、多くの人に日常的に使われる事ができないかと思い、取り組みを考えました。そのため、新たに投資をして造るのではなく、既にある物をできるだけ使う事で実現できるのではないかというのが、モチベーションになりました。

スライドにあるのが、スタートした当時の企画書のようなものです。3 つの NPO で検討をスタートしたのが 2007 年 6 月。実現させる為にはどういうことが必要かと、まず課題を洗い出したところ、一番大きな事だと思ったのが、ここでプレイする人（プレイヤー）が必要だということでした。我々を含めた 3 つの NPO が、2000 年頃から約 7 年活動してきています。大阪で活動している NPO やまちづくり系の団体も沢山ありますが、それまでの 5~6 年は、色々なところの活動を見ることで、コンセプトを含めて一緒に組めるところと、少し距離をおいた方がいいのでは…という団体とに色分けがされた時期で、とりわけ 3 つの団体は、一緒にできる事があると思う時期でした。それぞれ自分達がプロデューサー的な事をやっているのが多かったのですが、いつも苦勞をしており、プレイヤーがそんなに多くないという問題がありました。床をハードとして出すのはコンサルティング的な発想であり、可能かもしれないが、出した床を使ってくれる

人・運営してくれる人がいない事には、作ったけれども使われないという状況を生むだけだと初めに思いました。あとは、公的な河川敷なので、それを特定の店の営利目的で使うという局面をどうクリアするかという事です。それと、皆の目に触れるところに構造物を作るので、デザインを考えなくてはいけないという事がありました。後に有用だったと思った事が、北浜テラスイメージスケッチのような絵を一番初めに描いた事です。我々の中ではコンセンサスがありましたが、他の NPO の人達と話す中で、一番初めに目指すものはこれだねというイメージを作れたことが大変良かったと思います。よく、総論は同じだが進んでいく中で微妙に違い、最終的に実を結ばないという事があると思いますが、絵を描いたことで、一番初めの段階で、似て非なる事を考えているわけではないという事を確認できたのではないかなと思います。そこで3つの NPO が出会うわけですが、それまでに私が所属する NPO が、どのような事をやってきたかをさかのぼって説明します。

活動が始まったのは 2002 年頃。おおむね他の NPO も、この時代から何らかの活動をしていたようです。水都大阪の中心になっていいる八軒家浜という栈橋ができていますが、それができる 10 年前は護岸の下の遊歩道にブルーシートが並んでいました。我々はこの頃、水辺で遊び、過ごすことがあり、この状況をたまたまよく見ていました。この景色というのは、普通は護岸の上しかみえないので、見ていない人が多かったのではないかと思います。我々は見ってしまったため、なんとかならないかと考えました。川から見ると、空調の室外機が並び、ビルの川側がほとんど使われておらず、電気が点かないという事に、あれ？と皆で話していたのが始まりだったように思います。

同時に、色々な先生に昔の大阪はもっと水に近かったと感じる写真、映像、記録を見せてもらうことができ、昔の方がいいなと話しをしていました。その中でいくつかの活動をしていくわけですが、私は不動産業なので、不動産屋としてできる事は何かという事でやり始めたのが、水辺不動産です。

先程言ったように、夜に電気が点かないという事は、ビルの川側の部屋があまり使われていないということです。昼間見てみると、やはりダンボールが積みあがっていたり、倉庫に使っていたりという状況が一目でわかりました。そんなに綺麗な川ではないですが、とても気持ち良い場所なのに、という気持ちから、もっと水辺のスペースを使う人が単純に増えたら、電気が点くと思ひ、始めたのが水辺不動産です。

今日まさに午前中も大阪でやっていたのですが、水辺不動産物件ツアークルーズというものを実施しています。まちを色々巡るというツアーが沢山ありますが、それはそういう既存のものにお任せし、今現に借りる事のできる、わいわいできる物件のみを船で巡りながら紹介するというクルージングです。

この水辺マップは、水辺のことだけを紹介する地図が当時なかったもので、我々が作りしました。地図自体は色々なところが活動する毎に作られるので、我々は2版まで作り、今はもう作成していません。

水辺ランチの光景です。毎月第3水曜日に行なっています。中之島の東端がとても気持ちの良い場所なので、「どうせランチを食べるならここで食べませんか」と声を掛けています。ここに何かお店を設え、イベントチックにしたわけではないのですが、少しずつ人が集まり、写真のような風景になりました。今は中之島自体が整備されており、芝生があります。天気がいいときは、

皆自然と水辺ランチをしているので、我々がもう声をかけなくてもいいのではないかという事で、一応の役目を終えました。

水辺ナイトというのも行っています。水辺ランチを8月の暑い日に我慢してするというのは格好悪いなあという事で、8月だけはナイトにしました。夜に気持ちいい水辺を過ごしませんかと呼びかけています。これは、ランチよりは空間を設えています。橋の上にドリンクを提供するような場所をもって来たり、それぞれが音楽をやったり、当時は珍しかったミニクルーズ的な事をしたり、銘々が一晩だけ楽しめます。すごく沢山の人のびとを動員したお祭りを、僕らがしようという風になったら嫌だなという気持ちがちょっとありましたが、毎日これくらいの人はいて欲しいという位の人たちが丁度集まってきてくれたのが、開催していた理由です。ご存知の通り、今は水都大阪というカテゴリでイベントが行われるようになっていきますので、我々の活動としては終了しています。

天満埠頭です。小型ボートを大阪の川に走らせたいという取り組みです。水上バスは、以前から大きな企業がやっていたのですが、なかなか棧橋が利用できていませんでした。2日前に書類で申請を出さないと棧橋を使う事ができないという仕組みで、現実問題として、なかなか簡単には使えませんでした。それをもう少し簡単に使うことができないかということで、社会実験を行いました。

仮設で作った棧橋を基地にし、既にあった5つくらいの棧橋へ、同じ世代の大阪府の職員の人達にボランティアで来てもらい、1日だけ、来た船を迎え入れてみようといった取り組みです。この棧橋を起点にして、色々な棧橋に行けるような水上タクシーという構想で、実験をしました。先ほど1日といいましたが、実際に実施したのは9日間です。その時に、棧橋なので埠頭には待合が必要となり、待合には何がいるだろうと考え、川の上でカフェを出すことをあわせて実験を行いました。

タクシーとして、日常の足というところまでにはなっていませんが、小型の船はずい分走るようになっていきます。棧橋の利用に関しても、ずい分簡略化して使えるようになっていきます。

それ以外に、我々が日常で使っている中心地の水辺だけでなく、大阪界隈の色々な水辺の利用施設を巡ったりもしています。

様々な知恵を持っておられる方と、テーマを勝手に想定しては、集まっています。

シンポジウムにも参加しています。

一緒にやっているメンバーがどっぷり水辺にはまっていたので、一年のうちどこかに旅行に行ったら、必ず色々な所の水辺に行き、その時の話を聞く事を重ねていました。これが世界の水辺の風景です。

また、初めての人やNPOの人じゃなくても参加して良いですという形で、毎月1回、見聞の交換をしていました。その中のひとつに、デザインプロジェクトと呼んでいた活動があり、そこでは何でもない河川敷がこうだったらいいのにといい、いたずら描きをビジュアルにして持ち寄っていました。その中の1つが北浜テラスです。

そんな風に5年間活動している中で、他のNPO団体2つと、水辺不動産をやっている兼ね合いで、対象になりうる場所のビルのオーナーさん、店舗のオーナーさんと同時期に出会いました。

先ほど言いましたように、ビルのオーナーさんは管理ができなくて困っているという問題が根底にありました。特に初代理事長は、サラリーマンをやっていたのが何かのきっかけで、先祖代々

の料理旅館をやるようになった人で、昔みたいに川から入るお店をしたいと企んでいました。そこで、ビルの外壁改修のために組む足場を利用し、独自で川床の原型を造っていました。その方と話をし、一緒にやることになりました。

川床の話になりますが、先ほどの通り 2007 年に、オーナーさん達、お店の方達、NPO が会いました。そして NPO 活動をしている中で、2 年後に水都大阪 2009 という大きなイベントがあることを知りました。その大きな動きの中で、床を出せないかと考え、2007 年当時から色々な検討を行いました。物理的にどうしたら床を出せるのか、申請や許可、どのような調整が地元で必要かなどの検討を約 1 年間行い、結果的に、1 年後の 2008 年 10 月に 1 カ月間の社会実験として、仮設で床を出す事になりました。この時、水都大阪 2009 実行委員会事務局が約 1 年前に立ち上がっていましたので、そこに一旦社会実験をする母体になってもらいました。その前提で、河川管理者にも許可をもらうことができました。

その時の提案書やプランを書いた時、川床について先行している京都・鴨川の方達から、昔からやっていたが、後から法律ができたために、逆に今すごく苦労されている話などを丁寧に教えていただき、すごく参考になりました。先行して河川敷を使っていた例として、川沿いの活用がすでにあった広島のスキーム等も勉強させていただきました。

社会実験で出た課題について、どのようにしたら解決できるかを実験結果として出しました。

その後、中之島界限 4 か所で規制緩和をするという話が出ました。

水都大阪実行委員会は、2009 年のイベント後は無くなるのがわかっていたので、この後どうするかという話があり、どんなスキームならばずっと出せる床になるだろうというのを社会実験の課題の中で解決していく必要がありました。

結果的に、2008 年は仮設で床を出し、ビル側の負担として、壁を切って床を出さないといけないため、ビルオーナーが自腹で行っていた状況でした。社会実験の 1 ヶ月の間にイベント的な事を行い、沢山の人来てもらおう工夫をしました。色々なメディアで取り上げていただきました。

社会実験の結果をまとめ、地元で、この仕組みでの川床をこれからもやるべきかの話し合いを行いました。

段々と地元の参加者が増え、2009 年以降は、実行委員会ではなく協議会を作らないといけないという事になり、協議会を作りました。その為のルール、デザインの自主企画、協議会規約など、全部を作りました。そして、水都大阪 2009 イベントの本番の 1 つのコンテンツとして、採用してもらいました。2009 の時には、既に常設で鉄骨を組み、川床を作りました。その後、2009 年 11 月に、大阪府から常設して良いという許可をもらうことができました。

2009 実行委員会はイベントと共に消えましたが、我々水辺協議会が、今は占有許可を直接行政からもらっています。

床も当初の 3 つから始まり、今は 6 つになっています。現在 2 つを申請中なので、春には 8 つに増えます。こういった形で北浜テラスをやっています。大阪の状況としては、いくつかの団体が別々に今も活動し、プロジェクトによっては手を組んで活動しています。そのような状況なので、行政からも色々認めてもらっています。

以上です。

服部（堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会）

末村さん、ありがとうございました。

私自身、北浜テラスには 2 回訪れたのですが満員で入れず、残念ながら体験できていません。大阪の人びとのバイタリティは、非常に参考になったのではないのでしょうか。

では、2 つ目の事例である、水の都ひろしま推進協議会事務局の勢良寛さんから、広島で取り組まれている、河川河岸緑地のオープンカフェと、市民民間活動の連携、雁木等の親水空間を始めとした川面に向けたまちづくりへの取り組みについて、お話しいただきます。

それでは勢良さん、よろしく願いいたします。

勢良（広島市観光交流部）

こんばんは、広島から来た勢良です。私は水の都推進協議会と言っていますが、広島市役所観光交流部、水の都観光というセクションの職員です。水の都ひろしま推進協議会は、事務局を公設しています。今日は、広島の取り組みを紹介したいと思います。

まず、広島の川の特性と課題、環境、歴史、概要を説明します。広島市は人口 118 万人の政令指定都市です。区が 8 つあり、市街地に 6 本の川と運河があり、広島デルタの上に市街地が発達しています。広島駅と平和記念公園の間が都心の核であり、夜の繁華街もこの辺りです。ドラゴンズが今年優勝し、とても強いですが、広島には最下位の横浜より目立たない地味なチームがあります。以前は、平和公園の並びに旧市民球場がありました。都心部だったのですが、今は広島駅の近くに新球場ができています。広島の市街地はこういった立地です。

川の話をしてします。太田川というのが一級河川で、市街地で 6 つに分配しています。東側から、猿猴川、京橋川、元安川、本川、天満川、それから太田川放水路です。一級河川ですので、基本的には河川管理者は国の国土交通省中国地方整備局です。しかしながら、猿猴川、京橋川の 2 本の河川については、広島県に河川管理者が委任されています。また、港湾の方が広島県の管理という、複雑な状況になっています。私たち広島市には権限がないので、水の都づくりは必ず国、県、市で協力して行うという事になっています。

川の状況ですが、満潮時には猿猴川と京橋川の間水がたつぷりありますが、干潮時には見事に干上がり、大きな干潟ができてきます。この干潟はヘドロが露出する為、見栄えも悪く臭いをするのが課題になっています。

干満差が 4 メートルとなり、全国的にも 1、2 位を争います。例えば、今年の 11 月 26 日の潮位のグラフですが、干潮時は -22 c m、満潮時が 376 c m となり、4 m 近い潮位差があります。となると、船もペタンコで作らなければいけません。100 c m を下回るとスクリーンが擦り、300 c m を超えると屋根を擦ってしまいます。ひと月の半分位が大潮、中潮という状況です。

歴史的にも水の都ということで、広島という町は、戦国時代の西国の覇者、毛利元就の孫の毛利輝元が広島城を築城した所から始まりました。護岸を築き、埋め立ててできたまちで、川が城の堀の役割をはたしていました。江戸時代には運河がいくつかあり、今よりも水の都でありました。江戸時代、明治時代には、舟運で人や物が運ばれてきました。陸と川をつなぐ階段を雁木と言いますが、それが沢山あります。材木をあげたりする為の、幅の広い階段もありました。今でも広島には、400 の雁木が残っています。広島の水タクシーは、雁木タクシーという名前ですが、この雁木を使って色々な場所に行けるような工夫をしています。

川に向いたまちづくりという事で、原爆ドームは、元々広島県物産陳列館という名前で、川に向かって建物が建っていました。昭和20年8月6日に原爆が投下され、年末までに14万人の人が亡くなりました。多くの人が、水を求めて川に入って死んだという悲しい歴史がある川です。ちょうど写真部分が、8月6日に灯籠流しを行う場所になっています。戦後になると川は親しまれ、市内のあちこちで子供が飛び込んで遊んでいました。しかしその後水質が悪くなり、そういったことはできなくなりました。

現在の取り組みは、この後詳しく説明しますが、水辺のオープンカフェや水辺のコンサート等に、私共の協議会は取り組んでいます。それから、先ほどの水の都水上タクシーや、世界遺産航路。これは、世界遺産原爆ドームと宮島をつなぐ航路になっています。そして、河岸緑地の整備や、船の停泊場の整備など、公共整備にも取り組んでいます。川には漁業者もいて、しじみ漁やうなぎ漁が行われています。環境教室や歴史的なイベント等、さまざまなイベントも開催されています。

水の都ひろしまの代表的な取り組みです。オープンカフェは現在8店舗で、約15万人が利用しています。水辺のコンサートが原爆ドームの対岸の所で開催され、約1万人の人が足を止め、音楽を聴いてくださりました。水上交通の方は水上タクシー、河川遊覧船、世界遺産航路を合わせて、年間9万人の利用があります。これが多いのか少ないのかという見方がありますが、すごく規制が多くて何もできない河川空間に、民間事業を取り入れ、これだけの賑わいと経済効果を出しているという所に着目していただきたいと思います。

知名度については、広島も頑張っているのですが…。“水の都のイメージに最も近い都市は？”というアンケートをミツカン水の文化センターという調査機関がとりました。第1位は大阪で23.5%。10年位前までは、京都と拮抗しているデータがあり、どちらかという京都の方が上でしたが、先ほどの取り組みを聞いて、水都大阪はすごいなあと感じました。2位、3位は岐阜県の大垣、郡上八幡。水の都というより、水の郷というイメージなのかなと思います。大都市と小さな町とが混じりながら出て来るので、本当に自由に記入されてそのまま集計されています。どんぐりの背比べになります。広島が出てきませんね(笑)。名古屋が0.4%、広島は0.3%、水の都のイメージは、こういう結果になっています。

気を取り直して、広島が自慢できる話をしたいと思います。全国に先駆けた、水辺のオープンカフェについてです。経緯としては、1990年から水の都整備構想を作り進めており、21世紀になる前後から、少しずつ本気になってきました。というのも、ハードな整備だからです。この当時は、親水テラスやリバーウォーク、橋のアンダーパスなどのハードな整備を行いました。しかし、いまいち使われていなかったため、この辺りからソフトな開発に進んでいきました。最初にやったのがオープンカフェです。2000年から京橋川カフェテラスを実施しました。国に働きかけながら、推進協議会を作ったり、構想や計画を作ったり。2004年がターニングポイントとなりました。広島市と大阪市が、河川法河川利用の特例措置を受け、社会実験の適用の指定を受けた年です。それによって、京橋川オープンカフェを行いました。それから、独立店舗型を行い、元安川に至りました。2011年3月、河川利用の特例措置が廃止されましたが、廃止された内容が、河川法の準則に取り込まれました。特例措置の適用を受けた、大阪・広島・福岡・名古屋の4都市の社会実験の取り組みが評価され、準則が取り込まれたのです。これで、全国のどこのまちでも、河川空間で営業活動ができるようになりました。この名古屋もそうですが、全国各地から視察を

受けいれています。

昨年、川沿いを歩いて欲しいというコンセプトで、オープンカフェマップを作りました。割と精緻に書いています。原爆ドームと平和記念公園をつなぐ橋が元安橋で、ここに水辺のオープンカフェがあります。イタリアンレストランで、パスタやピザが人気のお店です。ここのお店をやっているのは、ビルの管理会社と市外で人気のあるお店をしていらっしゃる方で、企業が組んで出店しています。先ほど、年間8店舗で15万人と言いましたが、この立地のため、このお店で4割の6万人を稼いでいます。広島名物の牡蠣を川に浮かんだ船で食べられるという、牡蠣船も浮かんでいます。

京橋川オープンカフェ通りは、600mの間に7店舗が集積しています。いずれもチェーン店ではなく、全て一店舗もののお店です。郊外で力をつけたケーキ屋さんが町にでてきてやっている事例、牡蠣の生産者の方のお店の事例、ホテルの方が経営する事例、民間のカルチャーセンターが喫茶コーナーを拡張した事例、ホテルが有名なお店の経営者にテナントに入ってもらい経営した事例等、オープンカフェの事例の宝庫になっています。

店舗の形態としては、地先利用型と独立店舗型とがあります。地先利用型というのは、民有地と河川空間が連続している事例で、名古屋の堀川でやっているのはこのパターンです。独立型は、道が挟まってしまうので、店舗を建てなければいけません。もしかしたら、納屋橋のほとろすはこのタイプではないでしょうか。間に路が入って、店舗が川の中で独立しているという形態になっています。

今、広島には地先型4店舗、独立型が4店舗あります。店舗のスペースを前に出すには、それなりの社会的な貢献をしてもらおうという事で、市民トイレや通り抜けの通路を作る事を条件に、このはみ出しを許しています。

事業スキームについて。出店者と協議会は出店契約を結んでいます。そして出店者は、周辺の清掃や花壇の水やりをやってもらう、サポート協定を結んでいます。一方で、この契約の中で事業協賛金を推進協議会に納めてもらっています。推進協議会は行政に納めず、地域に還元しています。準則が変わり、今、直接協議会が河川管理者から許可を受けるというスキームが普及しています。

利用者数は0から15万人になり、賑わいや経済効果がありました。

成果について、京橋川オープンカフェは、以前は夜は寂しく真っ暗なところでしたが、整備後はにぎわいができ、歩行者が増え、新たな楽しみ方ができ、観光スポットとして定着しました。じゃらんやるるぶ、まっぷる等で広島の特集があると、必ず紹介されるようになりました。夜歩くのが怖い所でしたが、夜が明るくなり、地域も明るくなりました。イベントも誘発し、そのような賑わいもできました。

事業協賛金は、8店舗で年間300万円位です。周辺の緑化や共用部分の電気は、事業協賛金で払っています。イルミネーションやコンサートを行ったり、大きなイベントに合わせてカヌー体験などを行ったりしています。

各界の力を結集という事で、市民、民間、行政の間として、産学官の連携という部分について、簡単に説明させていただきました。

市民の方たちも頑張っていると思います。寒中水泳やアートイベント、清掃活動、環境教室、地域のお祭り、川下り等色々な活動が川で行われています。広島の川は、なんとか冬だけ泳げる

のです。夏は大腸菌が増えてしまうので、寒中水泳しかできない川になっています（笑）。

市民活動促進助成については、これだけ沢山行われたという事でご理解いただければと思います。助成は21年度でやめてしまいましたが、7年もやっていると、同じ事業に二度と助成しないというルールをつくってしまった為に、さすがに弾がなくなってきたという状況です。多くの活動は、他の部局の助成制度に置き換えて行っています。これだけやったおかげで、水辺の活用のバリエーションの発掘になったと考えています。

国、県、市がばらばらではなく、私どもがお願いしなくても、それなりに水の都らしいハード整備をしてくれるようになりました。

産学官の協力について。典型的な例で言うと、干満差が大きくヘドロがたまる事に対し、火力発電所から出る石炭灰を固形化し、ヘドロ層にうずめたり上にバラまいたりしながら、ヘドロ層の奥に空気や水を送り込むシーンを作る事で、ヘドロが無くなったり、微生物が多様化していくという実験を何箇所かで行っています。それには、中国電力や広島大学などの研究者が深くかかわっています。

また、水上交通は完全に民間事業です。雁木タクシーはNPO法人でやっています。世界遺産航路、遊覧船は民間業者です。それぞれが連携を図りながら、水の都づくりを進めています。

以上発表を終わります。

服部（堀川1000人調査隊2010実行委員会）

勢良さん、ありがとうございました。

行ってみたいと写真を見て感じました。堀川まちづくり構想も、水の都構想のようにありたいと思います。

では最後、3つ目の事例であるBOAT PEOPLE Associationの山崎博史さんから、船×αの様々な取り組み事例や、都市水面に触れる機会づくり、水辺とまちのつながり、水辺魅力の発信方法等についてお話いただきます。

それでは山崎さん、よろしく願いいたします。

山崎（BOAT PEOPLE Association）

山崎です。よろしく願いします。東京や横浜の運河で、都市河川を使ったイベントなどを行っています。カテゴリは市民活動団体になると思いますが、一般社団法人という法人格のある団体になっています。

活動実績を簡単に説明します。建築関係、不動産、アート関係、飲食、都市コンサル等、船や水辺に関心を持っている仲間で、2004年に結成しました。最初のプロジェクトは、品川観光協会から依頼されて、品川・港の運河マップを作りました。続いて、2005年に横浜のBankART1929「食と現代アート展」の中で、船と川を使ったワークショップをやってみないかという話があり、その頃からBOAT PEOPLEの名前で活動し始めるようになりました。色々なところから声がかかり、運河マップを作ったり、横浜市が力を入れている横浜トリエンナーレ2005で、実際に船を使って水上ラウンジを作ったりもしました。またその延長で、今度は内閣府の都市再生モデル

調査というのを受け、バージ船を防災ステーションにしようというプロジェクトを行い、使われていない防災船着場を有効利用した水上施設をプレゼンしていきました。あとは BankART 地震 EXPO 等に出店しています。その他にも横浜には、川と港湾を使ったアクティビティがあまりなかったもので、それに対して提案したところ助成が付き、テクノスケープやそういうものを見せていくクルーズを行いました。最近をよくありますが、2008 年にはまだそのようなツアーは無く、先陣を切ってやっていました。横浜の港湾リサーチクルーズの流れで、次に東京都の歴史文化財団の文化発信プロジェクト室主催の「東京アートポイント」にて東京の河川、水辺をリサーチするプロジェクトを実施しています。あとは、横浜国際映像祭の中で、アーティストとのコラボレーションで船と港湾施設を使ったグラフィティラボなどもやりました。

元々このような水辺に特化したグループを結成した経緯は、メンバーの井出がバージ船を転用して仲間内の BAR を運営していたのですが、口コミで多くの人が集まるようになり当局から無許可営業ということでお叱りを受け、やむなくクローズしたのがきっかけです。バージ船は、コンテナができる前に、貨物船と港を結んでいた船です。これが 2002 年当時運河に多数余っている状況だったのです。水上スペースは非常に面白く、このような場がなぜ東京の水辺には無いのかという素朴な疑問があり、これを合法的に実現するにはどうすればいいのかというモチベーションから始めたのがきっかけです。

どういう場所だったかという、芝浦の業務船の船溜まりです。上にはモノレールが走っており、都市の空白のような場所になっていました。(今では超高層マンション街です)

都市の中心にありながら、人があまり立ち寄らない水辺。そういう所に 1 つの小さなスペースから何か仕掛けられたら面白いのではということです。

2003 年～2005 年頃の時代の話です。この時代は、湾岸戦争と言われている程、超高層マンションが急速にできた時代でした。私の本業はゼネコン設計で、タワーマンションについて関わっており、運河の状況をすごく興味深く見ていました。その中でいろんな人達と知り合い、もうちょっと水辺をリサーチした方がいいのではないかという事で活動を始めました。

写真は豊洲です。セメント工場がマンションに建ち変わっています。ちょうどバージ船が横切っている図ですが、こういう物が水辺から消えてゆく、ドラスティックに状況が変わっている時代、それが 2005 年頃だったと思います。

ご覧のように、東京の水辺にはタワーマンションが建ち並ぶ状況で、人口がこの 10 年位で爆発的に増えました。水辺に人は住んでいますが、眺める水辺からはなかなか発展しませんでした。何故水辺が使われないのか。湾岸のマンション街にボート等を係留して、色々お店ができたら面白いのではというシンプルな疑問が出発点です

ちょうど、東京都運河ルネッサンスなどで規制緩和を受けた水辺の施設がいくつか実現され始めた年で、横浜もナショナルアートパーク構想として、港湾にアートスペースを作るなど、いろんな動きが出始めました。

そのような状況の中、趣味的な範囲で港湾、運河のポテンシャルはどういうものかとリサーチし始めました。その中で、自分たちの遊びの延長の中で、どういうアクションがありうるのか？リサーチとアクションを小さい所から試行錯誤しはじめました。このように、仲間内で議論をしながら、使い手の視線で水辺の可能性やコンテンツを整理していきました。

それからアクション、イベントとしてどういうことができるのか、イベントをやっていく事によって、どのように水辺の在り方に反映していけるかなど、話し合ってきました。

具体的に、マッピングというのが形になりやすいという事で、実際に川辺を歩き、気になったところをマッピングしていきました。いわゆるお店や緑地があるところの他、船をつけるのに適した場所、陸から水辺へのアクセスのしやすさ、水辺に近いコンビニや水場、トイレのプロット防災栈橋など、船からの視点で水辺をマッピングしていきました。

これは、そういった活動の中でワークショップを行い、いろんな方に地図に気になったところをマッピングしてもらったクルーズをやった時の写真です。

さらに、簡易ポンツーンをどのように使っていきたいかというスケッチを描いたり、現実的な提案を続けていましたが、リサーチの中で、既存の使われていない栈橋が沢山あるという事が分かり、こういうものをもっと使っていけばいいんじゃないかという、いただいた提案についても、もちろんマッピングされています。

これが関東唯一の水辺のアートのスペース、**Bank ART** になりますが、ここで初めて、イベントとしてリサーチで得た疑問を問いかけとして提案する機会に恵まれました。テーマは **FLOATING CAFE**。水辺・水上での食文化や市場が、現代アートや都市とどのように結びついていくか、そういう事を議論しました。

Bank ART はもともと、日本郵船の倉庫でした。荷揚げをするのにすごく適した静かな水域にあります。そこからボートで川をさかのぼり、食材を市場で買い、持ち帰って栈橋で簡易な水上マーケットを開く。イメージとしては、中国の蘇州の水辺のマーケット、昔横浜にあったであろう水辺の賑わいをイメージして行いました。

10 人乗りの手漕ぎボートを使いました。川から船でアクセスしたが食材を買える場所がなく、橋から物を下ろすしかありませんでした。物を岸から船に受け渡せる場所が市街地には無かったのです。橋からザルに食材を積み、船上の人に渡し、お金をザルに乗せ、また引き上げてもらうという形を楽しく演出しました。本当は、栈橋があつて、船を下りてマーケットに買いに行って、ということをやりたいのですが、現代の東京や横浜の水辺では、難しい状況でした。この食材を **Bank ART** に持ち帰って、水辺でバーベキューをするという、食のイベントを行いました。色々な方に参加してもらい、都市の水辺の状況を知ってもらう機会になりました。

トークの中では余っているバージ船をどうやって利用していくかという事をスケッチに書いて、説明したりしています。実際に使われていないバージ船は、沢山あります。面積は 70 平米位のスペースがあり、耐荷重も優れているので、土を入れ水上菜園にしたり、フローティングスパにしたりも可能です。

これは「浮動産価値」の提案としてフローティングヴィレッジを提案したものです。即時移動可能なスペースは陸上とは違った空間価値を生み出す宝庫ではないでしょうか？

次にタイミングよく港湾施設で開催する横浜トリエンナーレ 2005 という大舞台に出展する機会に恵まれました。東京の廃棄物運搬業者に中古のバージ船を安価に譲ってもらいました。廃棄処分予定だったものです。

これを横浜まで京浜運河を曳航し、横浜トリエンナーレ 2005 に水上ラウンジとして出展しました。約 180 万でスペースを作りました。この写真は、地元の港湾業者に水面スペースを借りて、その中で作業をしているところです。屋根は農業用テントをセルフビルドでかけています。

横浜市主催のアートイベントという事で、特別に護岸を貸していただき、水面利用をしました。通常の法規制の中ではありえないことを現代アートの作品という枠組みの中で実現した水上スペースです。手前味噌ですが係留に成功した時は大変感動しました。

そのバージ船を使い水上シンポジウムを行い、港湾局、国土交通省、デベロッパー、アートキュレーター、いろんな分野の方々に来ていただき、それぞれに水面利用の観点で話を伺いました。その中で、公共性の高い水辺や水面を利用するにあたり、やはり防災という切り口で進めていくと通りが良いという話しが出てきました。その為、もう少し防災色を強めた形で、水辺を利用する提案を検討するというヒントを得ました。

これは船を外からみたところです。面積が大きい為、一番簡易でお金がかからない屋根として、農業用テントを使っています。

こういうスペースを作るのは良いけれど、どうやって使っていくのが重要です。そこで葉山の海の家をモデルにしながら都市のカルチャーを水辺や船に入れ込む実験を試みました。都市運河に船を係留し、リビングの延長のような、公共性のあるカジュアルなスペースを提案していたら良いのではないかという事をイメージしています。

実際に、こういったライブペインティングやライブを行いました。

これは、実際にミュージシャンを呼んでライブをやった時の模様です。今はよくやられていますが、こういう試みについて、スペースとインフラがあれば都市の運河でも可能性があるという事を実際に示しました。

その後、内閣府の再生プロジェクトというのがあり、以前からマークしていた使われていない大井競馬場傍の防災船着場にバージ船を係留しました。機能としては災害時に防災倉庫として転用できる機能を持たせ、平時は水上ラウンジとして使用できるよう、コミュニティーのあるスペースを展開したという事例です。ここは都市の裏側、サービスヤードのような場所ですが、こういうものが1つできる事によって居場所が出来、運河が身近なものになると感じました。

写真は防災用トイレです。電源につながっておらず、真空パックにして、汚物を処理するというものです。ソーラーバッテリー、バイオマスディーゼル等を積んでいます。陸のインフラと切り離されても、自立して運営できる空間を小さいスケールで実際に造ってみました。

その中で、実際に防災キャンプとして癒しのスペースをどう作るかという事で、アーティストにアートを展開してもらったり、避難キャンプというテーマでダンスパフォーマンスを行ったりしたものです。キャンプでどうすごすのかという、不安な気持ちと希望をアーティストに表現してもらいました。実際に水の上なので、引き波が立つと船が揺れます。余震のようなその状況の中で一晩過ごしたりもしました。

そんな事をやるうちに、また **BankART** から声が掛かったため、大井にある船を横浜に曳航して行った時の写真です。ちょうど地震 **EXPO** という地震をテーマにしたイベントをやっており、移動する防災シェルターとして、1週間ほどあこがれの護岸に係留することに成功しました。

その他、スペースから離れた形で運河を使ってみようという事で、横浜キャナルクルーズを企画しました。横浜市の先駆的芸術活動助成プログラムとして行いました。僕らがフィールドとしている港湾・運河の面白さや状況を広めていくためのクルーズです。このイベントでリサーチという行為は新たなエンターテイメントになりえると確信しました。その後「ブラタモリ」などの待ち歩き番組が好調なことからも理解できるのではと思います

これだけのエリアをコースに取り込み、京浜運河を非常に広域に使っています。

細かい運河を隈なく回っており、運河の色々なコンテンツを発見していこうとしました。

サイロやバージ船など、普段見慣れないコンテンツが沢山あります。フローティングドックや現役稼働な倉庫をリノベーションしたりするなど、今後の可能性のある港湾風景をクルーズの中で参加者に発見してもらえたら面白いかなという事で行いました。

これもあまり知られていませんが、横浜には漁師町があります。工業地帯や運河の裏側に隠れています。そういう所をクルーズで紹介する事により、水辺の奥深さをわかってもらえるかなと思っています。

造船所のスペースも、今後の可能性がありますし舳溜まりの風景などを船からしか見る事の出来ない風景、コンテナ船のグラフィック的な視点なども参加者に解説しています。

このような活動を行っている、いろいろなリピーターが増え、イベントをうつつと2日位で埋まってしまう状況ができてきました。助成金に頼らなくても、自立して運営していけるようになってきました。僕らのグループの特徴ですが、大概の水辺の NPO は、根魚的に地域に根ざした団体が多いと思います。ローカルコミュニティな活動です。それに対し、僕らはテーマ型で、水辺探索、Web コミュニティというのが特徴となっています。回遊魚のように巡回し拠点がないことの強みやメリットを、もう少し生かしていきたいと思っています。従来の NPO は地域との繋がりが強く、メンバーや企画が固定化した傾向があります。住民参加を推進している事に対し、僕らは移動そのものや都市風景をどう楽しんでいくか、拠点をどう繋いでいくか、そのような事について、船を使って色々提案しています。

東京都の文化発信プロジェクト室について。水辺というレイヤーから、東京をどのように観ていくと面白いのかという事を提案しました。LIFE ON BOARD という名称にし、水上の都市生活をイメージしたクルーズです。

東京の水辺は色々なエリアがありますが、その中で江東区の水辺リサーチを東京低地クルーズという名前で行いました。地図のブルーの部分、いわゆる0m地帯になります。そういう所をクルーズすることで、治水インフラがどういう状況にあるかを紹介するのがコンセプトになっています。地図の赤に囲まれた部分が外郭堤防です。江東区はぐるっと強固な堤防や水門、ロックゲートで守られています。その中に入って、どう治水されているかを検証していくというものです。左側の地図が初期の状況です。埋め立てがされる前は、半分位が海に浸かっており、本当に埋め立てでできた土地なんだという事がわかります。下の地図が明治初期です。そういう事をこの地図を見て紹介しながら、クルーズしています。

とにかく現地に行ってみようということをしつこくやっています。

入ったことがない河川が無い位、細かく水辺を回っています。動力船が入れないところは、手漕ぎボートを使ってでも、細かい運河に入っていきます。この写真は、東京の一番低い橋をくぐった時のものです。茂森橋とありますが、こういう低い橋をクリアするという遊びもしています。本当は、ボートを陸地から降ろせる場所があると良いのですが、現状はほとんどありません。入りたい水路のそばまで動力船でいき、乗り換えて入っていくという手の込んだことをしています。その先には見たことの無い東京の風景が発見でき大変好評でした。

これは、江戸の水迷宮クルーズというテーマを掲げたクルーズです。古地図でみると、古川という川が江戸の古地図に載っており、現在でも形を大きく変えずに残っています。そういう所を

細かく回りました。この写真が古川です。手漕ぎボートでないと、とてもじゃないと入れない場所ですが、東京らしい景観が残っています。江戸から残る石垣、その上に首都高などのテクノスケープが覆いかぶさっています。これは、陸からではわかりづらく、実際にボートで入ることで都市の重層感がわかってきます。高速道路の下は、屋形船の船溜まりになっています。そういうものが好きな方は沢山いて、映像をやっている人が特に多いです。そういう方たちがリピーターになり、水辺のサブカルチャーができてきます。

よく古地図を参照しクルーズルートを組み立てます、

日本橋では首都高を撤去しろという話がメインになっていますが、もっと観光コンテンツとして利用していったらいいのではないかというスタンスで、僕らはやっています。江戸橋ジャンクションなど川から見ると巨大なアートワークに見えます。見られることを意識していない土木インフラがこんなにも美しいことに感動します。

これは、映像を投射し、橋の下の空間を楽しんでみようという事でやっている活動です。これは神田川。ご覧の通り、ビルの谷間。都市の静脈、そういう雰囲気が都市河川にあります。

これもクルーズの風景です。こういう平べったい船を捜し、低い橋の下をクルーズしていきます。僕らがやるまでは、こういう低い船は流行っていませんでした。大阪には沢山ありますが、東京には少なく、そういうものを探し出しチャーターし、特別なコースをクルーズするという事をやりました。今やもう大流行で大手の旅行会社も参入しており、なかなかチャーターできなくなっていました。

これは周辺の不動産状況です。このようなアクティビティーが水辺の建築に、どのような影響を与えるかという事例です。これは秋葉原です。水辺に開いていないホテルがありましたが、こういう事をやっているうちに、水辺に開くようになりました。今、神田川ではテラスを川に向け設置したレストランがこれの他にもう1ヶ所あります。こういう建物がだんだん増えていくといいなと思っています。

写真はテラスから見た雰囲気です。

防災シュミレーションに船を使った事例。船橋の漁港と都心をつなぐ。船橋の漁師さんに参加してもらい、実際に都心に野菜を運び込むイベントを行いました。被災時の支援物資として提案しています。

写真は、坂口さんというアーティストです。0円ハウスという廃材から、ブルーシートを使ってシェルターを作るという制作ワークショップを一緒に行いました。

防災キャンプから防災船着場まで食材を運んだりもしました。

あとは、帰宅困難者輸送クルーズも行いました。

今取り組んでいるのは、横浜の黄金町です。黄金町の公共棧橋（川の駅）を運営している団体がいるのですが、高齢化と企画不足により稼働率が下がっています。その方たちに新しいアイデアとカルチャーを提案し一緒に棧橋を使った企画運営を始めたところです。地域に根ざしている団体と組む事により、棧橋の有効利用をし、水辺のある街の価値を高めていこうと考えています。発表は以上です。

服部（堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会）

山崎さん、ありがとうございました。

サラリーマンをされながら、これだけの活動をされているというのは、すごい衝撃でした。

大変興味深いお話をいくつか聞かせていただきましたが、質問などは最後にまとめて受けさせていただきますので、よろしく願いいたします。

それでは、第2部の準備もありますので、ここで一旦 10 程度の休憩とさせていただきます。休憩時には、前面スクリーンに堀川映像を流します。ライフワークとして全国の都市河川映像を撮影している映像作家の野田真外さんが堀川を撮られたもので、普段なかなか見ることのできない堀川からの風景や、川に行く魅力が詰まっています。

「名古屋静脈」です。どうぞご覧ください。

【第2部 トークセッション・水辺空間の使い方】

服部（堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会）

時間になりましたので、第2部を始めます。

第2部では、はじめに studio-L 代表の山崎亮さんからお話いただいた後、名古屋のメンバーとの意見交換を行います。

山崎亮さんは、地域の課題を地域の人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わっておられます。関西弁で話されますが、愛知出身の方です。

使う人次第で都市基盤がいかにか魅力的な空間になり得るか、また、そのために、市民、市民団体、行政は何を考え、行動しなければならないのか等についてお話いただく予定です。では、山崎さん、よろしく願いいたします。

山崎（studio-L）

今日はこの場でお三方のお話を聞くことを楽しみにしてきました。期待どおり、すごく楽しかったです。興味深いのは、僕の番が回ってきた段階で時間が 30 分おしていることです。そういうシンポジウムはなかなか体験できないものです（笑）。

今日お話しする予定の内容を変更したいと思います。自分のプロジェクトの説明を割愛して、先程のお三方のお話をベースに、気がついたことなどをお話させて頂き、残りはこの後のパネルディスカッションに譲りたいと思います。それでは簡単な自己紹介として、普段どんなことをしているのかをお話したいと思います。

私はもともと、ランドスケープデザインという公園や庭を設計する仕事をしていました。ところが、最初のうちは利用者が多いものの、徐々に誰にも使われなくなるという公園が多いことに気が付きました。水辺と同じです。水辺も昔はよく使われていましたが、最近は使われなくなってしまいました。水辺の場合は、ウォーターマネジメント、ブルーマネジメントという方法で対応しますが、公園の場合はパークマネジメントです。具体的には、公園の周りの、NPO 団体やサークル団体、クラブ団体、自治会、商店街など、色々な方々に声をかけ、彼らに公園で自分達が

やりたいプログラムを実施してもらい仕組みを作る仕事です。市民の方々と一緒に、公園をもう一度面白い場所にするための取り組みを行いました。

先程も、様々な水辺の活動の事例紹介がありましたが、水辺ですとは想像もつかないような例が沢山ありました。想像がつかないからこそ面白いんです。実は公園も同じです。パソコン教室、音楽、昆虫観察、凧揚げ、アイロンがけを皆で並んでやるイベントなど、公園からは想像のつかない取組みがされていると、興味をひかれて出かけてみる気になります。このように、通常ならばイベント会社に頼むところを、市民の人達自身に関わりながら公園全体を盛り上げていく仕組みを作るのが、「パークマネジメント」という仕事です。

さらに規模が広がり、公園の中だけではなく、まち全体を楽しくできないかと言われるようになり、「まちづくり」の仕事をするようになりました。市民の方々とお話しするのが仕事ですから、5年間で1000人～1500人位のまちの人と友達になります。すると今度は、友達になった人達と一緒に、まちの総合計画を考えるという仕事をしないかと声をかけていただくようになり、今は「総合計画の策定」という仕事もするようになりました。

その他、「研究」や「教育」もやっていますが、僕自身がやっている事は、あくまで、「まちの人が自分達で課題を乗り越える」ためのお手伝いです。例えば会場に集まっていた方で10人位のチームを作り、それぞれのチームで話し合いをしてもらいながら、地域の課題を乗り越えていってもらう。この一連の流れが「コミュニティデザイン」と呼んでいる、今の僕の仕事です。

先程、大阪の末村さんから北浜テラス水辺協議会のお話しをしていただきました。お話の前半は、個人的な趣味で始めた活動だったというニュアンスだったと思います。“水辺の周りに明かりが点っていた方が良く、そこに人に住んでもらえれば、夜に明りを点してくれる”という思いから自分は不動産屋として何ができるかと考えた結果、水辺に面した不動産を紹介し、そこに住みたい人を募集されました。水辺は末村さんご自身の本業から少し外れているけれども、本業と結びつけながら活動を始められていました。

その後も、マップをつくり、実際に水辺を使ってみたいという興味から「水辺ランチ」を呼びかけて、真夏の暑い時に水辺でランチをしていると格好悪いからと「水辺ナイト」を企画し、さらに水辺だけでなく船をもっと気軽に使いたいとの思いから「天満埠頭」を企画されたとのことのお話しがありました。この間にも、水辺に関する見学会や勉強会、シンポジウム、水辺の会議をずっと継続されていたようで、研究熱心だなという印象を受けました。ほかにも、河川の将来的な理想像を絵に起こして持ち寄られてもいましたね。

次の段階では、水辺のビルオーナーさん達のテラスや仮設の床の設置に向けた動きや、他のNPOの活動と一緒に連携し、さらに動きが拡大していきました。具体的には、社会実験あるいは水都大阪という大きなイベントの枠組みの中で、他のアーティストと一緒に水辺を全体的に使いこなすを目指す取組を行い、その過程の中で協議会が生まれてきました。

その後は、協議会の存在が重要になってきます。遊びの延長から責任ある主体となったことで、話し合いを重ねることで少しずつ信用してもらい、実際に水辺を使う許可を出してもらえるなど、賛同する人が現れます。このような動きに繋がっていったということが、すごく面白いなと思いました。

現在6店舗がテラスを使っていて、残り2店舗がもうすぐテラスを出すのではないかとお話を

ありました。3つのNPOが集まって始めた事ですが、ほかのNPOの人達と繋がりを広げて結果にも結び付いているのが、末村さんの活動の特徴だという気がします。

続いて、広島勢良さんは行政の立場からお話をしてくださいました。1990年に水の都の整備が始まり、ハード整備は整っていましたが、ハードはつくったがうまく使われていないという問題が出てきました。これは僕の公園に対する問題意識と同じですね。

話を戻して、広島では2000年頃からソフトの取り組みが始まり、オープンカフェやテラスができました。その4年後に河川法河川利用の特例措置に基づく社会実験を実施できることになり、新たなオープンカフェが設置されました。特例措置は2011年に廃止されてしまいましたが、新たに準則に取り込まれたことで、オープンカフェも恒常的なものになっていったという動きを説明していただきました。

広島でもオープンカフェのマップも作っていらっしゃいます。大阪の末村さんもマップを作ることからスタートされましたが、堀川ではマップはできているのでしょうか。マップを作るところから始めるというのが、一つの定式なのかもしれません。

広島では現在、イベント等水辺を皆で楽しむための事業協力金として、8店舗から300万円ほど出されているそうですが、これがあるからレストランも賑わっているし、関係性も維持しています。協議会的な仕組みや信頼されるような枠組みも重要なポイントである気がしています。一般の企業や大学とのコラボレーションも、特徴的だと思いました。

最後に、東京の山崎さんのお話です。実は私は前々から活動は聞いていました。2000年から2年間、バージ船という特徴的な船で水上レストランをやっていた。その水上レストランができなくなった後も、リサーチして実際に行動し、うまくいった所といかなかった所を明らかにして、もう一度リサーチして、更におもしろいものにしていくという循環をつくられていました。PDCAサイクルという言葉聞いた事があるかもしれませんが、やはり計画して、実行してみて、反省し、さらに良いものにしていくことが大切です。水辺を使いこなす場合も同じです。水辺でできない事は沢山あるけれども、まずは一度やってみる。そして何ができて、何ができなかったのかを整理し、回していくというのが必要なのではないかと思います。

この事例でもマップを作られています。しかも、マップ作り自体をワークショップにしてみましたね。

そして山崎さんの団体も横浜トリエンナーレ、BANK Art等の大きな活動の主体と一緒に、自分達の活動を広げていらっしゃいます。堀川沿いにはどんなイベントがあるのでしょうか。デザインイベントやアートイベントが名古屋でもあるかもしれませんが、堀川もアートと連携していたかどうか、気になるところです。

水辺から見ると、色々な所が新鮮に見えてきます。特に横浜のテクノスケープが面白そうだなと思いました。工場の風景は、普段陸地からではなかなか見えませんが、水辺からみるとすごい町の姿が見えたりしますし、町を裏側から眺めるだけのクルーズをしても面白いかもしれません。江戸の水迷路クルーズもかなり面白そうでした。川幅がものすごく狭いのですね。そして今は地域型の陸地でやっているNPOと水辺のBOAT PEOPLE Associationの方々がつながっています。このあたりが特徴的だなと思いました。

まとめとして、ここに3事例のポイントを挙げてみました。

最初のポイントは、個別の実践を先行させることです。マップを作ったり、水辺のランチをし

たりすることからスタートしたことが最終的には大きな取組みに広がっています。小さな事でも始めてみることに、仲間を集めてみることに、あるいは、大きなイベントと連携して活動していくことが重要です。関係なさそうなイベントでも、水辺に絡めて企画してしまうのです。水辺や水上で、ありそうでない取組みをやってみるとするのが面白いと思います。

次のポイントは、ここに協議会型、プラットフォーム型と難しい表現をしていますが、取組みを継続していくうちに、後半になるにつれて皆とだんだん連携していき、何か責任ある主体になっていくということが特徴的だと思いました。組織を立ち上げることからスタートすると、うまく動きません。まずは小さな実践が重要です。そして仲間が増えてきたら、仕組みを作り、お金の流れを作り、話し合う場を作ります。そして取組みの実践を重ね、信頼される場にしていきます。しかし、協議会を作ったからといって個別の活動が面白くなくなるとは仕方がありません。皆が新しく面白い活動を持ち寄れる状態を担保したまま、その他の人達から信頼してもらえる仕組みをつくる、このあたりが難しいです。これがうまくできているのがたぶん水辺で、水都と言えばここだと言われるようにするには、このような仕組みが必要なのかなと思います。

次のポイントは、ハードが先か、ソフトが先かです。広島ではハード整備が先で、その後にソフト事業がありました。しかし異論があるかもしれませんが、僕の感覚ではこれができたのは2000年くらいまでだったと思います。2000年頃までは、景気が悪くなってきた、ハード整備はもうないよと言われながらも、一応予算がついてきました。だからハードの整備を先にやり、その後どう使うか考える事も“あり”でした。ところが今はどこの自治体でも、市民の活動やソフトの仕組みが見えていないのに、先にハードを整備するというのは説明ができません。なぜつかなければいけないかと問われた時に、行政の人達が「水辺でこれだけ活動が起きている」、「皆こういう点で苦労している」、「もっと水辺に近づけるような形をやはり行政も整備していかなければいけないのではないかと」ときちんと説明できるような実践が先にないと、なかなか整備が進まない時代になってきたという感覚があります。つまり、小さな実践が既にできあがっていることが重要です。堀川の場合はいかがでしょう。行政が議会と話ができるようになっており、住民とそういう話ができるようになってきているのでしょうか。このあたりが重要になってくるという気がします。

最後は、本業を持っていることも強いポイントです。会場の皆さんも本業をもっておられるでしょう。あるいは、数年前まで本業をもっていたという方々でしょう。リタイアされた方々も、専門分野をお持ちでしょうし、経理や企画をやっていた方でも、いろいろな関わり方ができる気がします。お金の流れ、人とのコミュニケーション、アート、音楽も必要となってきます。本業のエッセンスをどう活かすのか、あるいは、趣味で普段からやっているエッセンスをどう活かしていくのかという視点が大切です。水辺に関係ないと思っている皆さんの本業や趣味を、一度水辺に持ちこんでみてはいかがでしょう。私が育てている3000個の盆栽を水辺に並べたらどうなるのだろうと、考えてみるのはタダです。とりあえず考えてみて、話しが出てきた時に、実は盆栽をたくさん持っていると言ったところから、ひょっとしたらバージ船でイベントができるかもしれません。防災と盆栽（笑）として、防災盆栽イベントなどができるかもしれません。このように、どこかでつながっていく可能性があるのです。自分達の本業や趣味が水辺と関係ないと思わず、水辺に持ち込むと変わってくるのではないかと考えてください。

このように、本業や遊びの延長がどんどん活動につながり、制度や水辺の風景を変えていくこ

とがあります。その際に、どのような人達がそこに関わるのかという点で考えてみると、コミュニティの種類が大事です。根魚的なコミュニティと、回遊魚的なコミュニティという表現がありました。さすがは **BOAT PEOPLE** の人達です。根魚的というのはつまり、自治会、商店街、婦人会や老人会もそうです。一方、回遊魚的とは、面白い事や餌があればそこに集まってくるというタイプの、つまり鉄道好き、ラーメン好きというコミュニティです。あるいはツイッター、フェイスブックというインターネット上のコミュニティも、自分達が面白いと思える人達が集まって話をしています。あるテーマのもと集まるコミュニティです。根魚と回遊魚がどううまくリンクしていくのか、このあたりも非常に大切になってくる気がします。

最後、水辺が寂しくなった理由を説明します。戦前までは、水辺を含むまちの公共空間は、その周りに色々なコミュニティがありました。このコミュニティの人達が、色々を使いこなしていたのだらうと思います。雁木、企業のコミュニティもありました。そういう人達が使っていたかもしれないし、あるいは町内会が祭りで使っていたかもしれないし、縁日がそこに出ていたかもしれないし、商店街の組合によるイベントがあったかもしれません。僕らは公共空間を考える時、戦後、寂しくなり段々と使われなくなった理由は、空間のデザインが悪くなったからだと思ってしまっていました。だから、時代に合わないデザインを変える、ハードを変えればいいと思い、実際に変えていきました。ところが、ハードを変えたのに相変わらず使われません。実は、集まりが「霧散」しているのが現在なのです。どうでしょう、自治会の加入率は下がっていないでしょうか。子供会が成立しなくなった時期が、あったのではないのでしょうか。祭りができなくなったことはないのでしょうか。これはやはり、人のつながり、支援型のコミュニティが弱くなってきたからだと思います。放っておいたら、どんどん弱くなりますが、これはある意味仕方ないと思います。コンビニやインターネットなどの魅力的なものが沢山あります。そこに繋がってしまうと、町内会に所属しにくいのです。それならば、その他のコミュニティ、これは回遊魚的なコミュニティと言ってもいいかもしれませんが、あるテーマのもと集まってくるコミュニティの存在があります。水辺の盆栽、鉄道、船、食材など、テーマで集まる団体がどのように水辺に関わるのか、この仕組みづくりが非常に重要になってきます。集まると、ハードの不具合が段々見えてくるので、そこで初めてハード整備ができるようになってきます。こうなれば行政の予算が付きやすくなります。細かい話を言えば、財政を説得しやすくなるのです。住民が年間これだけ活動し、問題や課題も見えている、という説明がしやすくなります。

ところが、何もせずに、回遊魚的なコミュニティが水辺に関わってくれるかという点と難しいです。本日事例を発表してくれた方々は、ある種特殊な方々です。黙っていても、水辺に果敢にチャレンジしようという方々はあまりいません。こういう方々がいるという事は、一つのモデルですが、普通に生活している人がいきなりバージ船を 15 万円で買わないでしょう。15 万円で買うのはまだしも、180 万円をかけてリノベーションしてしまう。なかなか普通の人にはできません。モデルになるような先進的な人と、普通の人はどう出会うのか。そして出会う中で、その活動に参加したい・活動したいと思える仕組みづくりが必要です。そこには、コーディネートする組織、行政の援助、土地を持っている人達の判断が必要かもしれません。不動産オーナーの協力をどう取り付けるのかもとても大切になってきます。放っておくと段々と霧散するのが、コミュニティの成れの果てですが、そうではない新しいタイプのコミュニティが、工業空間など水辺で色々楽しむための仕掛けづくりを行っています。相互に Win-Win の関係で回っていかないと、難しくな

るという気がしています。町中でそのような面白い事が行われているといいと思っています。

面白い文章に出会いました。建築家が40年以上前に書いた文章です。「建築とは何か」を聞いても応えはできません。人間とは何か、水辺とは何かみたいなものです。それを問うのではなく、「建築に何ができるか」という事を問おうということが書かれています。つまり、水辺に何ができるかという事を問おうという事です。「水辺とは何か」と、哲学的に考えても応えはできません。水辺に何ができるか。その時、今の社会に対して一番いい答えを、およそ水辺に今までできそうになかったもので答えるのがいいのではないのでしょうか。建築にできそうになかったものが答えとして出た時、夢物語をいうと、急に建築はそれに追いつこうと努力し始めます。水辺も同じです。水辺でこういう事をやってはいけないだろうという事を一度挙げたり、絵に描いたりしてみます。水辺に立体ポンツーンを浮かべて、間を庭として見立ててみたらこんな暮らしができるのではないか？いや無理だよと思っても、語ってみようやってみよう、なのです。そこから1つずつできる事を実現していくと、5年10年掛けて、思いもよらなかった堀川の水辺が誕生する可能性があります。その可能性を十分に示してくれたのが先程のお三方であり、その他日本中の水辺に関わっている実践者達であろうと思います。当然、堀川でもそういう小さな実践が生まれつつあるのだらうと思いますが、その時ぜひとも頭の片隅で、もっと極端に、およそ水辺でできそうもない事を思いながら、一つずつ実践していただければ、そこに新しい水辺の風景が現れてくる気がします。

今日は自分のプロジェクトについて何も説明していませんが、もう十分に水辺の取り組みについては3つの事例を紹介いただきました。本業との関わり、コミュニティの種類、あるいは責任ある主体になる仕組み作りをどう考えていけばいいのか、この後、堀川で実践されている方々とディスカッションがあると聞いているので、その中で掘り下げて話を進めていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

服部（堀川1000人調査隊2010実行委員会）

山崎さん、ありがとうございました。

では、ここで堀川側のメンバーに前に出ていただいて、意見交換をしていきたいと思っています。堀川ウォーターマジックフェスティバル実行委員会から、丹坂和弘さん。名古屋市で取り組んでいる堀川まちづくり構想づくりに関わっておられる、名古屋工業大学大学院の秀島栄三准教授。名古屋都市センターの羽根田英樹上席調査研究統括監の3名です。

それでは、ここからは司会を羽根田さんにお渡ししますので、よろしくをお願いします。

意見交換

羽根田（名古屋都市センター）	羽根田です。 今日は3つのテーマに沿い、それぞれの方から簡単に意見をいただければいいと思います。先ほど山崎さんが総括されましたが、マップは堀川でも作ってあります。市民が作ったわけではないですが、コンベンションビューローが作成し、船からの眺めという事で12月に最新のものができています。それから、堀川は昨年開削400年として、色々な活動が活発に行われました。しかしなが
----------------	--

	<p>ら、さらにもっと頑張りたいということで、ディスカッションしたいと思います。フラワーフェスティバルや、金曜の夜に納屋橋辺りで若者が飲んで歌ってと楽しくイベントをしています。さらに、我々の先人が作った川なので、後世の私たちが責任をもって楽しむ、そういう心意気で今から進めたいと思います。</p> <p>最初に、「イベント」というキーワードについて、ある意味「とんがった気づき」をお話して下さい。地元ではなかなか言い難いかもしれませんが、あえてそれを脱却し、とがった意見を。BOAT PEOPLEさんは、非常に面白い取り組みをされています。水辺を使うという事では、目から鱗でした。特にイベントについて、堀川でもっとこんなことができるのではないかという事を述べていただきたいと思います。</p>
<p>丹坂（堀川ウォーターマジックフェスティバル実行委員会）</p>	<p>堀川ウォーターマジックフェスティバル代表の丹坂です。私は生まれも育ちも、堀川納屋橋のたもとです。ウォーターマジックフェスティバルは、過去9回行い、そのうち8回の企画を手伝いました。生まれも育ちも納屋橋なので、ずっと堀川を見ており、とても水辺というものが気になっていました。海外に留学していた時も、ロンドンやパリでも水辺を見ていました。学生時代が終わって名古屋に戻り、自分の故郷である納屋橋の水辺空間を使って色々やりたいと思いました。名古屋に戻ってきて、この堀川が折角あるのに勿体ないなど、このすごい資産をなぜ使わないのかと、切実に感じました。</p> <p>ウォーターマジックフェスティバルは、国、県、市が一緒になるイベントです。そこに首を突っ込んで活動してきました。堀川の不思議な力がコンセプトになっていて、堀川が持っている可能性を引き出して行こうというところから始まったイベントです。具体的には、折角川があるのだから、船を走らせ舟運を復活させようという事が1つ。もう1つは、水辺での文化芸術です。文化や芸術は、意外と水辺から発信されているものが多く、例えば、有名な音楽“美しき青きドナウ”も水辺から生まれています。そのような水辺アート、芸術をやりたいと思い、堀川水辺のページェントという事で、歌舞伎やクラシック音楽等、とにかく色々なアートの事を行いました。それからオープンカフェ。広島とタイミングは同じだと思いますが、納屋橋でもできればと思い、実施しました。水辺の魅力を知っていただくという思いで、これまで一生懸命取り組んでいます。</p>
<p>羽根田（名古屋都市センター）</p>	<p>オープンカフェは広島が有名ですが、実は1997年に名古屋が久屋大通で最初に行ったのです。デンマークのカールスバークをスポンサーにつけて、実験を行いました。その後、なぜか広島と千葉でも行われ出しました。名古屋は最初と意気込んでいたのですが、どうも定着したのは千葉が先のように、非常に残念です。定着がなかなか難しいのですが、先ほどのイベントは、ある意味では定着してきています。</p> <p>次に、“眺める”イベントがある意味多いですが、先ほどのBOAT PEOPLEさんは、眺める事から脱却されています。“使う”という事かもしれません。そのような観点で、堀川のイベントで、何かこんなのがいいのではないかという</p>

	<p>事があれば、ご意見をお願いしたいです。</p>
秀島（名古屋工業大学大学院）	<p>自分は土木工学で、道路や河川の作り方を考えているので、イベントはあまり得意ではありません。それは置いておき、使うという事から考えると、堀川は使うために造られたという要素が多い川です。ですので、使うことが減ってしまったから、衰退したところがあります。名古屋はパチンコ、風俗、いろいろな文化が生み出されている地域だと思うので、こういったところで生まれるものが、もっとあっていいと思います。</p> <p>東京のお話も含めて3地域とも苦労しているのが、水の干満差です。橋の上から物を吊るしたりされています。そうは言いつつも、先ほどのお話の通り、水辺からは新しいものが生まれやすく、際どいところ程わくわくするものが生まれてきます。そういうところに期待したいと思います。自分がやるというよりは、誰かそういう人が出てくることを待ち望んでいます。</p>
羽根田（名古屋都市センター）	<p>例えば、BOAT PEOPLE さんにこだわりますが、非常に大きなイベントを大きく利用されています。また、広島はうまく定着させています。そのような、色々なイベントをうまく根付かせるという事に、何かいい知恵はないでしょうか。</p>
山崎（studio-L）	<p>先ほど少しお話をしましたが、イベントには趣旨があり、主催者の思いがあります。必ずしも水辺を何とかしたいと思って立ちあがっているイベントだけではありません。たとえば BANK Art、横浜トリエンナーレなど、特にトリエンナーレ自体は、水辺を何とかしようという主旨ではありません。しかし、水辺の方からイベントのテーマに対し、このような刺激を与えることができるという提案をしています。先ほど、水辺×まちづくりということで、その“×”が大事だという話が司会者の方からありましたが、水辺と関係ないと思うよりも、水辺にどう掛け合わせるかという発想が必要です。その発想力があると、相互に利害が一致するのです。大阪の水辺テラスの場合は少し特殊で、水辺に特化した大きなイベントだったので、すごくのりやすかったと思います。反対に、BOAT PEOPLE さんがやられているのは、一見水辺とは関係ないけれど、そこにトライしていています。この「掛け合わせ」は、名古屋の人達はすごく得意だと思っています。てんぷらをおむすびの中に入れてみたり、苺を大福の中に入れてみたり、スパゲッティをあんかけにしてみたり。あまり他の地域からは、ユニークな食べ物は出てきていません。水辺と何かを掛け合わせ、常々柔軟に提案していくことが、少しずつ水辺の活動を認知してもらい、あるいは定着していくことの大きな一歩になるという気がします。</p>
羽根田（名古屋都市センター）	<p>次のテーマ、「活用」にうつりたいと思います。イベントとはどう違うか微妙なところですが、ある意味では長期間そういう使い方が定着していくと捉えることができます。例えば、フィジカルに物ができるなどです。活用という点で、最初に秀島さんにお聞きします。大阪の北浜テラスは、確か足場から着想されて、さすが大阪らしいと感じました。見事にああいった風にした持続性はすごいと思います。河川は土木構造物です。土木構造物をもっと使ってもよいと思</p>

	うのですが、そこら辺も含めてご意見はいかがですか。
秀島（名古屋工業大学大学院）	<p>少し違う話しかからしますが、先ほどのバージ船について。先日名古屋港で聞いた話ですが、舢（はしけ）がずいぶん減った背景の1つは、コンテナが普及したからです。我々は、結局知らないうちに、そのような選択をしてしまっています。舢はやめてコンテナの方がいい、船をやめてトラックがいい、もっと言えば、川をやめて道路がいい。そういう風に歴史が変わってきています。その中で堀川、あるいは中川運河もそうですが、使い方が必然的に変わってきています。</p> <p>では、使い方を具体的にどうするか。船で見る視点は、いつもと違うものを感じさせるはずで、それを感じさせる機会がもっと増えればよいと思います。広島ではNPO法人雁木組が活動しています。新しい可能性はいくつでもあります。そのなかの1つは舟運です。景色が違っていると感じるには、船が一番だと思います。</p>
羽根田（名古屋都市センター）	<p>新聞や風評では、納屋橋に再開発が起きそうだと書いています。それが実現すると、ずいぶん様相が変わります。それがきっとチャンスです。水辺不動産という言葉に思いがあるようですが、そこら辺を含め、あのような空間で、公共・民間の用地を問わず、何かの工夫にお気づきになったのでしょうか。</p>
丹坂（堀川ウォーターマジックフェスティバル）	<p>堀川の活用という事でいくと、真っ先には、やはり舟運の復活です。先日ウォーターマジックフェスティバルを行いました。納屋橋には船着場があります。朝日橋というところにも船着場があり、そこは名古屋城の正門から徒歩3分のところ。やはり、名古屋に来た観光客にまず案内するのは、名古屋城です。地下鉄やバスは他の都市と同じようにあるわけですが、その都市の水辺をクルージングするという事は、観光客には一番魅力的なことだと思います。朝日橋と納屋橋をつなぐという事をやりたいと、実は思っています。ですが、ここに1つハードルがあります。定着させるためには、いわゆる航路の許可を運輸局に取らないといけません。そして航路を一度とってしまうと、お客さんがいなくても定時に船を出さなければならず、とても採算が合わないのです。しかしこれをもし定着させる事ができ、名古屋城の観光客が船に乗って納屋橋に来てくれるという事になれば、商店街の人達は可能性があると感じるかもしれません。航路の途中に円頓寺商店街があり、四間道や古く良い町並みがあります。川が活用される事により、その沿川の町もどんどん変わってくる可能性があります。</p> <p>水辺不動産の話になると、例えば、船が走る事によって水辺が独特な魅力をもつことで、どうせオフィスを持つなら、どうせ住むのなら水辺が良いという形で、水辺の土地の活用方法も変わり、非常に良いプラスの連鎖になると思います。堀川の場合で考えると、まずは納屋橋と名古屋城をつなぎ、色々な人に水面から町を眺めてもらいます。その事により、水辺の使い方のアイデアがでてくるのではないのでしょうか。</p> <p>今のところ、ウォーターマジックフェスティバルというイベントは、私1人</p>

	<p>の企画で進んでいるところがあります。先ほど水辺会議やコミュニティの話しがありましたが、水辺空間を始めたいという方達に沢山集まっていただき、もっと議論する場を作りたいです。そういうところから、活用していきたいと思えます。</p>
羽根田（名古屋都市センター）	<p>水面議論から、じわっと沿川に効果を発揮するといった感じですが、大阪の時に、初めプレイヤーが心配されたという話がありました。こういう場所を作るけれども、果たして使われるのかどうか。活用についての重要なポイントだと思います。そこら辺について、山崎さんは色々な修羅場をくぐり抜けて来られたと思いますが、ユーザーを見極めるには、どう考えたらよいのでしょうか。</p>
山崎（studio-L）	<p>活用という意味では、非日常の活用と日常の活用と、二種類あると思います。先ほどから話しているのが、1つ目のテーマにもある、非日常的なイベントという形でどう活用していくかということです。先ほど話しがあった通り、航路をとると、日常にせざるを得ません。日常と非日常の接続をどうするのか。きっと非日常的にやろうと思っているものは、回数を増やし、日常に近づけようとしても無理があります。日常ベースの事をもう一つ別に考えないといけません。非日常と日常とをうまくあわせていくというより、別のものとして考えていかなければいけないと思います。非日常の回数を増やせば、日常になるとは思いません。</p> <p>日常と言う意味では、末村さんの仲間の吉崎かおりさんという女性います。小さなボートを持っていて、ボートを運転する免許も持っているのですが、車の免許は持っていません。通勤が一番空いている道で行きたいと思い、水辺の家を買い、水辺の職場を決め、家から船で通っています。渋滞もラッシュもないと言っていました。なかなか実現はできていないようですが、中古の船を買い、水上タクシーのプロジェクトもしています。そういう発想がすごく新しいと思いました。ボートの上で本を読むのは、近くに誰もいないし、すごく静からしいです。のんびりゆらゆら揺れながら本を読み、もう2時間も経っていたという過ごし方ができるのが、水上です。</p> <p>日常的に皆がどう使っているのか、格好よくおしゃれに使いこなしている人をどんどん知ること。そして、そういう人達と一緒に何かイベントをやり、非日常的にもこんな風に使っているんだという感覚をいかに伝え、広めていくかが大事だと思います。</p>
羽根田（名古屋都市センター）	<p>創造という事ですね。気づかない事を探す。堀川にも潜在的に、そういった使い方があるかもしれません。</p> <p>最後のテーマ「協働」です。どういう仕組みで、色々な事に挑戦していったらいいのでしょうか。協議会やグループなど、色々な形があると思います。私はどうも陸地側で、風と土というグループにいます。足すと風土になるという魂胆です。広島は、行政の立場でいくと、港湾管理者、県、市とそれだけで大変ではないでしょうか。堀川は数年前に市の管理になり、やりやすいはずだと思います。堀川には現に、地元の方や行政が入り、すごい協議会ができていま</p>

	<p>す。そういう中で、どのような仕組みや、協働の形があったら良いと思われませんか。</p>
丹坂（堀川ウォーターマジックフェスティバル）	<p>どういう風にやっていくのかについて。個人でやっても限界がありますし、仲間を作りたいと思っても、なかなか行政のハードルがあったりもします。今日の3都市の事例を見ていると、どちらかという行政主導かなと思いました。大阪のお話では、水都大阪という、大阪府、市、商工会議所、そういうところのリーダーシップが感じられます。名古屋人は基本的に、既存行政に従順な市民だと思っています。ある程度行政に方向を出してもらった方が、市民としてまとまりが良いと、実は思っています。大阪の人は、基本的に面白いならいいのではないかという事で進む事が多いです。名古屋は順法精神が高く、もぐりでやってはいけないという意識があるため、発想はあっても、前にもいけないところがあります。そこら辺をどういった枠組みにするかはわかりませんが、自由な発想がもう少し表に出て、うまく回る仕組み作りができないかなというところではあります。</p>
羽根田（名古屋都市センター）	<p>大変言いにくい事をありがとうございました。今思い出したのですが、大阪が今すごいです。橋爪紳也さんが数年前に堀川の事をお聞きになり、市民パワーすごいなと驚いて帰って行かれました。だから、自信をもってよいという気がします。ポテンシャルはここにあります。従順じゃなくても良いかもしれません。どのような形が良いと思いますか。秀島さん。</p>
秀島（名古屋工業大学大学院）	<p>今まで産学官民の役割や責任などの話しをしていましたが、今日一番強く感じた事は、誰がやっても良いという事です。やれる人がやるのが一番良いと、強く思いました。堀川協議会に今関わっていますが、役所の方に少し引いてもらってもいいのかなと感じます。では、代わりに誰かが出てくるのかということでは問題ですが。名古屋市役所は賢い人が多すぎるので、やりすぎているのではないのでしょうか。他都市では、給料をもらわずにやっていたり、違う専門の本業があったりする方が、多く活動されています。いい意味で、やっている人が集まっているのは、それだけでも非常に楽しいです。ですので、義務感でやるのではなく、楽しくやるのが一番だと強く思いました。</p>
羽根田（名古屋都市センター）	<p>大阪は面白いこと、名古屋はお得なことを重視しますので、それでやるというのではないのでしょうか。</p> <p>山崎さん。いろんな動きが名古屋にもあります。どういったアプローチがいいのか、これからの取り組みの姿勢のヒントをいただきたいと思います。</p>
山崎 (studio-L)	<p>お得ということには、大阪も割合近いです。「儲かりまっか」とよく言います。おもしろいという事と、儲かるかという事をバランス取りながら進めている感じもします。儲かるかどうかはわかりませんが、趣味でやっていく活動が何年か続くと、実際に仕事になる場合があると、一方では実感しています。大阪の水辺で活動している方々の何人かも、当初は、朝何時かに起きてご来光を見ましようという企画だったり、本当にマニアックな所だけを回るツアーをやりましようという企画だったりを、ほぼ遊びみたいに始めた後に、仕事になってい</p>

る方が何人かいます。

僕自身も studio-L という事務所をやっています。8年くらい前から、学生達を集めて遊びで始めたプロジェクトです。我々は設計をしていたのですが、むしろ物をつくらないで、その地域の人達のチームワークをつくるというような事を誰にも頼まれていないのにやっていました。ダーツを投げ、たまたま当たった地域に入って行き、盛り上げていこうという事を各所で重ねていました。これは、仕事とは別の時間、土日はずっと続けていました。そうしたら、そういう事こそやって欲しいと、行政から仕事に来るようになりました。ところが会社員なので、行政からの依頼を受けられません。いよいよ独立した方がいいのかなという事で、一旦独立し、すぐに株式会社を作りました。そして、そういうことを仕事にしていくという風が変わっていきました。だから、最初からこの仕事をやろうと思っていたわけではなく、遊びでやっていたら3年後位に独立することになっていたというのが、事の次第です。

水辺で活動する、水辺で色々な人達と繋がっていくということは、もちろん楽しいからやるという動機がスタートラインだと思います。この、楽しいからやるという取組みがだんだん広がり、例えばお得、あるいはそれで食っていくことにつながっていく可能性も十分にあると思います。

「協働」と離れているようで近いという話しを最後にしたいと思います。この種の活動をやる時に、大事なことが3つあると思っています。

1つは楽しい事、あるいは自分がやってみたいと思うこと。2つ目は Will、つまり意志です。しかし、それだけでは駄目で、自分ができる事からスタートしなければならないため、やりたい事とできる事のバランスをとって、活動を進める事が必要です。この2つだけで長続きするかというと、実は長続きしないかもしれません。自分達だけでできる範囲で、楽しい事を行っているというので満足するかどうか。誰か他の人から感謝される関係性があると、もっとやろうと思えてきます。つまり、3つ目は社会が求めることです。やりたいことと、できることと、社会から求められていること。この3つのバランスをとりながら、水辺で活動をしていけば、皆さん自身の活動が続いていくし、楽しいし、できる事が広がっていき、皆からも感謝されます。これが、協働の仕組みの中にうまく入っていないと、疲れてしまいます。自分達だけで楽しんでいるだけでは、何も周りの人達にとって良い事がないねと皆に見られ、段々と活動が小さくなってしまいます。この3点を組み合わせて活動することが大事ですし、協働の仕組みを作る時は、この3点をうまくバランスさせるような仕組みが必要です。プラットフォーム型が良いのか、協議型が良いのかは考えなければいけません。常にこの3つを皆が持ちながら、活動していくことが大切です。

最後に、最初にお話しした事と一緒にですが、それがなぜ仕事や得になるかについてです。実はこの三者は、近江商人が言った“三方よし”とほとんど一緒なんです。売り手よし、買い手よし、そして世間よし。この3つがないと、持

	<p>続可能な活動にはならないし、商売になりません。今、CSR と横文字で呼ばれているのは、実は“世間よし”。だからこれを水辺の活動でもうまくやっていけば、3年後や5年後に商売になり、つながっていく可能性が十分にあると思います。</p>
<p>羽根田（名古屋都市センター）</p>	<p>最後までめていただき、ありがとうございました。堀川で“世間よし”。堀川は非常に大事な時期に来ています。ここで頑張ると、ブレイクスルーするチャンスが必ず来ると思っています。NHK プロフェッショナル仕事の流儀の、1つ前のテーマソングのなかの、「あと一歩だけ前に進もう」という歌詞を思い出します。ところが、水辺の都のイメージとしては、名古屋は33位。1桁にいけるように、もっともっと前に進みたいです。</p> <p>それでは予定の時刻となりましたので、終了とさせていただきます。</p> <p>ありがとうございました。</p>

服部（堀川1000人調査隊2010実行委員会）

皆さま、どうもありがとうございました。もっと聞きたいお話が、沢山あったと思いますが、ここで終了とさせていただきます。

それでは、第1部、第2部に出席いただいた皆さんに、改めて拍手をお送りしたいと思います。どうもありがとうございました。

今日、最初に申し上げたアウトプットは何かというと、皆さんに気づいていただく事です。それから、“堀川×まちづくり”と申し上げましたが、ここにお集まりの150人の方々が、足し算ではなく掛け算で、一人一人が堀川に取り掛かっていくと、ものすごい成果が出ると思っています。

これをもちまして、「水辺×まちづくり 堀川水辺の空間活用シンポジウム」を終了させていただきます。皆様、お帰りの際はどうぞお忘れ物のないよう、今一度お確かめください。なお、お手元のアンケート用紙は、入り口付近の改修箱にお入れいただくようお願いいたします。

本日は、誠にありがとうございました。

以上